

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830060

研究課題名（和文） アートプロジェクトの事例にみる芸術労働の社会学的研究

研究課題名（英文） A sociological study of art workers in the case of art projects

研究代表者

吉澤 弥生 (YOSHIZAWA YAYOI)

大阪大学 人間科学研究科・特任研究員

研究者番号：20513162

研究成果の概要（和文）：

各地のアートプロジェクトの労働実態を把握すべく、日本、ロンドン、パリでインタビューを行い、報告書『若い芸術家たちの労働』を制作した。そこでは現場の人々の厳しい労働実態だけでなく、昨今の若年者就労をめぐる構造的な問題が明らかになった。現場の芸術労働者の声を集約した冊子は前例がなく、本報告書は具体的な文化政策の提言や新しい社会運動への展開に際し問題意識の共有や議論の土台として有効に機能するだろう。

研究成果の概要（英文）：

I interviewed young art workers in Japan, London and Paris to understand the realities of working in art projects. The report “The work environment of young artists” reveal that their conditions are strict and there are structural problems of youth employment over recent years. There is no precedent for the interviews, so this report will function effectively as a occasion to share problem consciousness and the base for discussion to recommend concrete cultural policy and to develop some social movements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	960,000	288,000	1,248,000
2010年度	930,000	279,000	1,209,000
総計	1,890,000	567,000	2,457,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：芸術、労働、アートプロジェクト、文化政策、社会運動

1. 研究開始当初の背景

芸術の社会化がすすんでいる。芸術作品はもはや、美術館やギャラリーの中で愛好家に愛でられるだけの存在ではなくなり、都市空間や自然を舞台とした大規模な展覧会や、多様な人々の協働によって制作から公開、維持管理までをおこなう「アートプロジェクト」を通して、まちづくりや教育、医療や福祉といった社会のさまざまな場面に進出してい

る。こうした「鑑賞」から「参加」へという芸術とのかかわり方の変化は、文化政策の整備と軌を一にしながら、日本では2000年前後から、欧米では1980年代から進んできた。より広い文脈で見れば、20世紀を通しての芸術自体の変化、すなわち西洋の芸術における「美」の価値基準が多様な新しい表現によって乗り越えられようとする動きと、芸術批評・文化研究の変化、つまり記号論を契機とした言語論的転回、西欧中心主義の相対化と

いう流れを、その背景に見いだすことができる。

近年、国内では 2001 年の「文化芸術振興基本法」に加え、「創造都市戦略」に代表されるような、都市政策の枠内に芸術文化を位置づけた政策のもとで、さまざまな実践がおこなわれている。ここではアーティストや市民による協働の機会が創出され、多様な表現が生まれているが、その際旧来の「ハイ・アート」ではなく、未だ評価の定まらない実験的芸術のアーティストやキュレーター、NPO スタッフといった若手専門家の活躍が目立つ。しかし、年々削減される予算、担当者やトップ人事に左右され事業評価すらままならない政策の現状、さらに行政と市民セクターの「協働」の困難といった根本的な問題があり、文化政策の現場は混乱を極めている。申請者はこうした研究の成果を、2006、2007 年度サントリー文化財団研究助成をふくむ、過去 5 年間に及ぶ大阪での参与観察、そして 2007 年度に着任した大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文科学」研究プロジェクトでの内外の調査をへて公表してきた。

そして、この現場で働く人々が長時間労働や低賃金、有期雇用といった厳しい労働環境に置かれている現実にも直面した。近年の「ワーキングプア」「プレカリアート」など若年者の就労・貧困問題に対し「自己責任」を問う声があるが、こと「芸術の領域で働くこと、お金を稼ぐこと」にかんしその圧力は大きい。「自分たちが好きなことをするために税金を使うのか」といった批判、「好きなことをしているのだから貧乏でも当たり前」

といった社会意識ないしは自己規定の存在は、この社会における「芸術」と「労働」の価値、ひいては表現、自由、市民社会といった社会の根本にかかわる問題をもつきつけている。

と同時に、こうした文化政策のもとでの動きに対する反応として、緩やかに草の根の表現や運動、ネットワークも広がってきている。そこではアートプロジェクトにとどまらず、「労働」や「表現」といった問題、いわば芸術の公共性とかかわる取り組みもなされている。こうした動きもまた、アートプロジェクトにおける労働の問題を考えるにあたって重要である。

2. 研究の目的

まずは、多くが公的事業としておこなわれ

ている、アートプロジェクトの現場を支える労働者の「なまの声」を集めることが第一である。そしてこの現場から芸術「労働」という側面を照射し、現代の芸術創造をめぐる社会関係／社会過程を包括的に明らかにするとともに、人間の根源的活動として芸術と労働を同じ地平でとらえることで、より実態に即した文化政策のあり方を提示することを目的とする。

また、近年ヨーロッパの社会運動のなかでは、不安定就労を強いられる新しい階級概念である「プレカリアート (precarious=不安定な)」、また認知や感情にかんする労働に従事する階級「コニタリアート (認知労働者階級)」という概念が用いられている。そこでこうした概念と、日本の若年者の就労問題や社会運動にかんする議論とを接合し、芸術労働の問題をグローバルな草の根の運動という視点から考察し、問題提起、議論をすすめていくことも目指す。

3. 研究の方法

本研究では、おもに公的なアートプロジェクトにかかわるさまざまな若手専門家、具体的には (a) アーティスト、(b) キュレーター、(c) プロジェクトスタッフ、(d) NPO スタッフ、(e) ボランティアスタッフ、(f) 公的施設スタッフ、それぞれに対する聞き取りを実施する。

調査対象地は (A) 日本各地、(B) ロンドン、(C) パリの三カ所である。

日本各地の聞き取りは、文化政策の現場の人々の労働実態を明らかにするために実施する。またロンドンとパリでの聞き取りは、日本とは異なる文化政策と労働・社会政策をもつ国での芸術労働の実態を知るためにおこなう。とくにイギリスは日本がモデルとする文化政策を、またフランスは他に類をみない芸術家支援政策を実施している。そしていずれの国でも、新自由主義経済のもとで、文化政策の縮小、社会政策のワークフェアへの転換がすすみつきあり、と同時にそれに対する抵抗の動きも形成されつつある。こうした比較調査によって、現場を担う人々の不安定労働に関する意識だけでなく、文化政策・社会政策、また社会運動や表現のあり方の相違の一端が明らかになると考えられる。

4. 研究成果

これまで 2 年にわたり日本各地で 24 名、

ロンドンで9名、パリで4名に対してインタビューをおこなった。そしてそれらを、インタビュー集『若い芸術家たちの労働』として2011年3月に刊行した。日本語、A5サイズで全72ページ、500部を作成して全国各地に配布している。

日本のケースは、1 アートプロジェクトのマネージャーやスタッフ、2 公的文化施設の職員、3 アートNPOスタッフ、4 ボランティア、5 フリーランスの5つのパートに分けられる。なかでも1-3のような雇用労働者の場合は、「労働者性」の観点から労働者の諸権利が守られてしかるべきだが、他の分野の労働者と同様、それが反故にされている実態が明らかになった。また施設運営の方針転換のしわ寄せが現場の末端労働者に向かい、離職や失職を余儀なくされるなどの事例もあった。一方、5のフリーランスの場合は、「労働者性」がないといえども、下請け孫請け状態の出来高払いといった権力関係が発生したり、あるいは雇用保障、社会保障の網の目から抜け落ちた生活を送らざるをえなかったりという問題が明らかになった。そしていずれのパートでも、いわゆるワーキング・プアと同等の生活水準で休みなく働いている実態があった。

いずれにせよ、こうした人々の低賃金長時間労働なくして現在のアートプロジェクトは成立しない。かれらは自身の仕事をやり遂げることを優先しているが、不満や疑問を抱き始めた人もいるし、そろそろ限界に近い職場もある。それでもかれらが声をあげないのは、「全員が大変なのだから自分だけが要求するわけにはいかない」という思いがあるからだ。したがってアートプロジェクトや文化事業がこうした自発性をあてにして計画実施されるようなことが、あるいは予算削減や計画変更などのツケを現場の労働者のやりがいにすり替えて「芸術振興」が語られるようなことが決してあってはならない。

一方、ロンドンでのインタビューは、ちょうど労働党から保守党へと政権が交代し、文化政策が不安定になっていた時期に実施した。そのため、インタビューからは将来への不安も見えるものの、日本よりも多様なたちでの文化支援（民間含め）と所得保障の存在が、かれらの生活のある程度安定させるとともに、そうした安定が芸術や表現のにも影響していることがうかがえた。ただ日本と同じように、「やりがいの搾取」と呼べるような状況もみられた。

またパリでのインタビューは、「アンテルミタン Intermittents」という、断続的に雇

用される舞台芸術実演家、技術者、映画やテレビ産業従事者が加入する社会保障制度の当事者に対しておこなった。社会政策がワークフェアへとシフトするなか、アンテルミタンにも同様の傾向がみられ、現在はその受給資格を満たせない「プレカール Précaire」が増えているという。かれらは拠点をもうけ、生活相談や公開研究会、コンサートなどをおこない、生き延びるさまざまな知恵を出し合う工夫をしている。

以上のように、現場のさまざまな芸術労働者の声を集約した冊子はこれまで例がない。ここから浮き彫りになる芸術労働の実態には、昨今の若年者の就労や貧困問題とも通じる構造的な問題、制度の問題が横たわっている。

じっさいに調査中から筆者はこの問題にかんする学会発表、招待講演などを5回実施し、すでに反響がある。今後も本報告書をもとにしたシンポジウムを、研究者やアーティスト、アートマネージャーらとともに東京や大阪で開催する予定である。本報告書は、労働問題を考慮した具体的な文化政策の提言や、さまざまな分野で広がっている新しい社会運動への展開に際し、問題意識の共有や議論の土台として有効に機能するはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

- ① 吉澤弥生、書評「フランコ・ベラルディ『プレカリアートの詩』」、ジャーナル『コンフリクトの人文科学』、第三巻、大阪大学、(2011)、pp.291-293、査読あり
- ② 吉澤弥生、対談「アーティストの労働と権利を考える」、『アートNPOデータバンク2010』、文化庁、(2011)、pp.26-33、査読なし
- ③ 吉澤弥生、書評「白川昌生『美術館・動物園・精神科施設』」、『パブリックアート・マガジン』、アーツ&ソサイエティ研究センター、(2011)、印刷中、査読なし
- ④ 吉澤弥生、「パブリックなアートの考察」、『ブレイカープロジェクト 2003-2011 ドキュメントブック』、大阪市、(2011)、pp.68-69、査読なし

- ⑤ 吉澤弥生、「もうひとつの、メディアになる」、青空大学「パペットをつくろう！」報告書、大阪市立大学、(2010)、pp.30-37、査読なし
- ⑥ 吉澤弥生、「妄想のパブリックアート@御堂筋」、『VOL』、4巻、以文社、(2010)、pp.174-181、査読なし
- ⑦ 吉澤弥生、「新世界『プレーカープロジェクト』の軌跡」、『アートマネジメント研究』、10巻、日本アートマネジメント学会誌、査読有、(2009) pp.94-104、査読あり

[学会発表] (計5件)

- ① 吉澤弥生、「アートプロジェクトの事例にみる芸術労働」、芸術社会学研究会第四回公開研究会、2010.12.19、東京藝術大学
- ② 吉澤弥生 (招待講演)、「労働と芸術のための時間 パート2」、オルタナティブカフェ、2010.12.17、アートエリアB1 (京阪電気鉄道・大阪大学ほか運営)
- ③ 吉澤弥生、「ポストフォーディズムの文化生産 (1) アートプロジェクトの担い手としての芸術労働者」、日本文化政策学会、第4回大会、2010.12.12、神戸大学
- ④ 吉澤弥生、藤井光 (招待講演)、対談「アーティストの労働と権利を考える」、AAF学校・東京校「思考の平衡感覚」、2010.9.13、アサヒ・アート・スクエア
- ⑤ 吉澤弥生 (招待講演)、「アートプロジェクトと労働」、コンフリクトの人文科学特殊演習、2010.10.8、大阪大学大学院文学研究科

[図書] (計1件)

吉澤弥生 (共著)、「文化概念の形成」、井上俊・伊藤公雄編、社会学ベーシックス第三卷『文化の社会学』、世界思想社、(2009)、pp.13-22

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉澤 弥生 (YOSHIZAWA YAYOI)
大阪大学・人間科学研究科・特任研究員
研究者番号：20513162